運　慶

江崎誠致

筑摩書房

運　慶

昭和三十九年四月五日　印刷
昭和三十九年四月十日　発行

定価三五〇円

著　者　江崎誠致
発行者　古田晁
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
振替　東京四一二三
電話東京(291)七六五一(代表)

印刷　三晃印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所

© 1964 Masanori Esaki

目次

生木彫り　五
焔の像　三四
願成就院　六五
遅い恩賞　一〇六
仁王門　一四〇
仏師羅漢　一六六

装幀　新本燦根

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

運

慶

生木彫り

承安四年（一一七四年）の初夏、齢十八に達した雲慶は、父康慶の怒りにあって房を出た。

当時、南都仏所の頭領法橋康助は、高齢のため一人では用便の始末もかなわぬ老衰におちいり、長男の法眼康朝がかわって仏所の采配をふるっていた。雲慶の父康慶は、すでに壮年であったが、未だ何の僧綱もなく、単なる大仏師の一人として、兄康朝に仕える身分であった。

仏所の中は三割に分れ、康助と康朝の住居にあてられた西の房をのぞく他の二房に、いずれも百坪をこす作事場が設けられていた。北の房は康朝と長男の成朝、南の房は康慶と弟子の快慶が支配し、それぞれ大仏師として百余の子弟をかかえ、造仏の作業に従っていた。

全国十数万にのぼる堂塔伽藍には、絶えず仏像の寄進がおこなわれる。長寛二年（一一六四年）法橋康朝が法眼に叙せられた蓮華王院本堂の造仏のときなど、関白藤原忠通卿の死によって観世音像千体が寄進された。こうした折、仏所はその需要を満たすため、大量の生産に応じうる組織が必要であった。それと同時に、当然のことながら、すぐれた仏師を数多く擁しておく必要があった。寄進者たちが、仏所だけでなく、仏師の名まで指定する習慣が次第に強まっていたからである。

しかし、寄進者たちの眼は、かならずしも公正ではなかった。というより、仏所の政治力がそれを左右した。寄進者たちの主力は、院と朝廷とそれをとりまく公卿たちである。その勢力にうまくとり入ったものが、勝利者となった。南都仏所は、康助と先代の無能に加え、康朝がまた名手ではなかったため、院と朝廷の寵はあげて、京の大宮仏所を率いる法印院尊に集っていた。次に名声を得ていたのが、京三条仏所の法眼明円。康朝の名は、大宮仏所の分家にあたる六条万里小路仏所の法橋院尚にさえおよばなかった。

そうした状態におちいりながら、南都仏所が数百人の徒弟をかかえ、どうにか余命を保っていたのは、南都諸寺の支援、わけても法相宗大本山興福寺の庇護があるためだった。何しろ、

堂塔百七十余、寺域五千町歩、近郷には広大な荘園を持ち、自衛のため数千の僧兵を擁し、かつては天平時代における仏教の中心となり、藤原一族の氏寺として、学淵玄昉をはじめ、善珠、仲算、真興、良慶などの名僧智識を輩出した大寺である。新たな造仏もさることながら、古仏の管理だけでもかなりの仕事であった。そして何より、興福寺の役僧たちが、法眼康朝はとにかく、弟の康慶とその門弟快慶の手腕を認めはじめたことが、南都仏所の危機を救った。

しかし同時に、それは南都仏所が天下の正統仏所となることを妨げてもいた。寄進者の主力である院と朝廷に対し、その統治を不満とする興福寺の僧兵たちが、ほとんど毎年、入京強訴をくりかえしていたため、同寺と密接な関係にある南都仏所への造仏下命を、二つに一つはひかえるといった気運が、院と朝廷に生じていたのだ。

もっとも、僧兵の横暴は興福寺に限ったことではなく、東大寺をはじめ、他の諸大寺とて同様だった。京においては延暦、園城両寺が、宿命的な血なまぐさい争いをつづけ、些細なことにも理非を弁ぜぬ強訴強談におよんでいた。こうした風潮はすでに数十年の長きにわたり、保元、平治の乱をへて、武士階級の急速な膨脹とともに、一層その傾向は強まっていた。

それだけに、宗派をこえた造仏を業とする仏師が、特定な寺と親密な関係を結ぶことの不利

は言うまでもなかった。仏師の家に生れたものは、幼年時を堂衆となってかかり寺に上る習慣であったが、南都仏所の面々は在京仏所の人々のように、そのあと無派として動く世故にたけていなかった。

結果として、興福寺だけの造仏を志したわけではなかったが、統率者の無能も手伝い、南都仏所は久しく不遇と沈滞の底に沈むことを余儀なくされた。しかも、興福寺においてさえ、寄進者が名指してこないため、造仏権が他の仏所の手に落ちることもしばしばだった。

そんな環境の中で、雲慶は十三の年、堂衆として仕えた興福寺を出て仏所に帰り、父康慶の支配する南房の徒弟となった。

この南房の仏師たちの腕は、他房の仏師たちをはるかに引きはなしていることが、雲慶にはまもなくわかった。中でも、すでに大仏師となった快慶の刀法は群を抜いていた。ゆるやかに甜めるように木肌を剥ぐ父康慶の刀法にくらべ、快慶の刀はその三倍もの速さで荒々しく動き、息づまるような緊迫感をたたえて木屑を削りおとして行く。しかも、そのあとに残された肌は、むしろ快慶の方が静かなのだ。雲慶はたちまち快慶の刀法に魅せられ、熱心にその指導をうけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

た。

仏師の修業は、並たいていの努力で達せられるものではない。御衣木の材質の選択、木寄法、運刀法、彩色といった造仏の技術ばかりでなく、厖大な数にのぼる仏像の種類を覚えなければならない上、その一つ一つがちがった法衣をまとい、ちがった胸綴や瓔珞をつけるのである。光背の基本形だけでも十二種に分れ、台座は十九種におよんでいる。その他言語に絶する煩瑣な約束事をまちがえてはならぬのだ。

しかも、徒弟制度の常で、そうした技術や約束事を、手をとって教えてくれるものは誰もいない。大仏師や小仏師の助手をつとめながら、実作を通じておぼえこんで行くのである。康慶は、嫡男とはいえ、雲慶を他の徒弟たちと同じく下積みの修業からはじめさせた。そうでなければ、決して一人前の仏師となることはできないからだ。雲慶が、熱心に快慶の指導をうけたというのも、その徒弟としてであって、最初から特別の待遇をうけたわけではなかった。

仏師の世界では、宮廷や寺院にくらべ、はるかに実力がものを言う。もっとも、仏師の位階を示す法印法眼法橋という三位の僧綱は、造仏の力量とは別に、多くは院や朝廷とのかけひきであたえられてはいた。そうした結果、大宮仏所が過大な評価をうけ、南都仏所が不当に認め

られぬという差別はあった。しかし、南都仏所の不振は、その頭領の造仏手腕の無さにあったことも事実である。

だが、それはとにかく、他のどうにもならぬ身分制度の世界にくらべれば、まだ仏師の世界は実力が尊重された。弟子筋のものでも、技倆抜群に達すれば僧綱の位をうけることができたし、高位にすすめば、独立して主家筋を凌ぐことも不可能ではなかった。

たとえば、やっと三十をこえたばかりの年で、はやくも大仏師の位置につき、南都仏所の看板仏師として康慶とならぶ快慶など、その資格充分だった。もっとも、彼に康慶の知遇にそむく気持は露ほどもなかったが、もし欲すれば、ゆうに一家をなす実力をそなえた偉材であった。

快慶はもと大安寺の末寺の堂衆で、十四の年、寺大工の徒弟となり、十六の年に康助のもとに入門した。当時十歳ばかり年長の康慶は小仏師となっていたが、以来快慶は兄弟弟子として康慶と行を共にした。人並みすぐれた膂力と勘の持主で、徒弟時代その手に削りとられた木削の量は、常人の十倍にも達した。そうしてみるみる腕をあげ、五年足らずのうちに、康慶をのぞけば仏所中彼の右に出るものはないまでに上達した。

快慶のはげしい精進に刺激されて、康慶を長とする南房の若い仏師たちの手はいっせいにあ

がった。雲慶が興福寺の堂衆を下り、父のもとに帰ってきたころには、快慶の兄弟弟子に、やや彼より年長の定覚、ほぼ同年の定慶、源慶、まだ二十代の栄快、長快といった、法眼の位にある仏所の総師康朝や、その長男の成朝などを、はるかに抜く能手が輩出していた。

もちろん、仏所中四人の大仏師には、法眼康朝を筆頭に、成朝、康慶、快慶という実力とは別の序列や格式はあったが、仏所を支え、その仕事の大半を引受けていたのは、まさしく康慶と快慶の率いる南房のすぐれた若い仏師たちであった。雲慶はその躍動する人々の群の中に投げこまれ、もまれながらきびしい辛い修業をつづけた。

雲慶は逞しく育った。入門二年目、その体軀は仏所最大の巨漢快慶にせまり、腕の太さは雲慶の方が勝った。康慶はようやく十五歳になったばかりのわが子の掌を見て、たわむれに八ツ手と名付けた。雲慶はその愛称で呼ばれるたびに、掌を八ツ手のようにひろげて股にあて、見下ろしながら父の命を承わった。

逞しく成長したのは、その肉体ばかりではなかった。造仏手腕の上達の速度も、徒弟時代の快慶を凌いだ。つまり、雲慶の才能は、仏所中これまで誰が示したよりも目ざましく、わずか

四年を出ずして、快慶の推挙により小仏師の仲間入りをした。

雲慶ははげしく快慶の刀法に惹かれ、その指導を受けながら小仏師の位置についたわけであるが、なぜか、彼自身の刀法はかならずしも快慶に似なかった。むしろ、おだやかな父康慶の手法に近かった。それでいて造仏の速度ははやく、手つきが妙に熱っぽく、彫られた像はどこか均衡が崩れ、肌に生身の人間のような艶があった。

雲慶が小仏師となって、はじめて彫った像は、土地の豪族の寄進による阿弥陀如来像三体のうちの一つであった。仏所にこうした注文があると、仏師の指定がない場合、頭領がその願主の身分や報酬の多寡などによって、仕事を各房に割当てる。それを更に、各房の大仏師が自ら手を下すか、小仏師にまかせるかを決定する。

そうして割当てられた三尺の阿弥陀像を、雲慶は十日で彫った。彩色をほどこす前、康慶も快慶も一切手を加えず、康朝のもとへ検分に出した。

――未熟な、これが仏か。――

念仏のかわりに呪詛をとなえ、安心のかわりに苦悩をよび、仏にあるまじき人間の精気がみなぎっているという批評とともに、雲慶の阿弥陀像は突きかえされた。

康慶はあらためて阿弥陀像の造仏を長快に命じ、戻された雲慶の像には一言の批評も加えなかった。快慶は苦笑いしながら、雲慶をはげました。

――雲慶どの、悪い出来ではござらぬ。だが、康朝どのの言も聞かずばなるまい。――

そう言って、快慶はその阿弥陀像を作業場の壇にならべた。

たしかに、雲慶はまだ未熟であった。しかし、造りかけや納入前の諸像とともに置かれたその阿弥陀像は、何か内側から張りだしてくる、得体の知れぬ力をはらんでいて、あたりに不思議な威圧をあたえた。くすんだ作事場が、一角から動きだすような錯覚をおぼえさせた。

――雲慶どのは、大器となられましょう。――

快慶は康慶に向かって、雲慶の天才を予言した。

――どうだか。とにかく、あれはもっと沈まねばならぬ。快慶どの、少し諸仏を見てまわらせてはどうであろうか？――

康慶は、弟子たちの指導について、快慶の意見を求めるのが常であった。南都の寺々には、飛鳥以来蓄積された大海のごとき仏像の大群がある。その中のすぐれた仏像をよく雲慶に見させれば、おのずから会得するであろうと考えたのだ。

快慶の賛同をうけて、雲慶は寺院めぐりをはじめた。興福寺は言うにおよばず、東大、西大、薬師、元興、大安、法隆の七大寺をはじめ、人口にのぼるほどの仏像を擁する寺々は、片はしから訪ねてまわった。

仏師の拝観は、特別の事情がないかぎり許される。雲慶の前には仏像の密林があった。彼はその森に挑み踏みこんでいった。大寺には幾日も泊りがけで、あるときは一体の像と終日睨みあって暮すこともあった。彼は彫ることを忘れ、ただ見ることに憑かれた。

そうした日々が半年近くもつづいたころ、雲慶ははげしい焦燥に駆られだした。はじめ、その焦燥がどこからくるのか、自分自身わからなかった。ただそれをまぎらすために、彼は次の仏像を見つめに出かけた。

この変化を認めた康慶と快慶は、誤った判断を下した。雲慶が己の力の限界を知り、古仏の心を汲みとろうとしている苦悶の姿だと思ったのだ。しかし、雲慶の焦燥は別であった。幾万体もの仏像を眺めつくして、ついに、そのいずれにも心底からの感動を覚えないという、絶望に似た感情が次第に強まっていたのだった。

彼が狂おしく、感動を求めれば求めるほど、仏像たちは遠ざかって行くように思われた。光

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.